

ヨーロッパ博物館視察記 X

Survey Reports of the Museums in Europe X

間 多 善 行

Yoshiyuki MADA

パ リ 2

8月23日、いよいよ最後の日になった。予定に従って地下鉄でトロカデロ広場まで乗ると、ちょうどシャイヨー宮の前である。地下鉄にも慣れて、もっと遠くまで出かけて見たいが僅か5、6分で着いてしまう。シャイヨー宮は1937年の万国博覧会に建てたものだそうである。その前の万博は1889年にフランス革命百周年を記念して行われ、エッフェル塔が建てられて、現在もこの丘からセーヌ河を隔てた対岸に屹立しているが、1937年のこのシャイヨー宮は大して評判にならなかったのか、37年といえば昭和12年であるから、あれば私の記憶にある筈であるのに何も覚えてない。もっとも昭和12年といえば第二次大戦の発端といわれる支那事変の勃発した年であるから、万博などという呑気なものは日本の報道が取り上げられなかったのかもしれない。もう既にその頃には報道管制が布かれていたろうから。

それはさて置き、シャイヨー宮はセーヌの右岸段丘のように高くなった丘の上にあり、曲玉を二つエッフェル塔の方から見て眉毛のように並べた変り型の建物である。案内書によるとトロカデロ広場の方からエッフェル塔に向って右側の曲玉に人類学博物館、海洋博物館、映画博物館があり、左側の曲玉に史蹟博物館、国立民族劇場、水族館がある。民族博物館というのがもう一つあるが、これは右側の人類博物館に併設されているようである。何しろ曲玉のようだというのは、上から見たいわゆる平面図が曲玉のような曲線になっている建物という意味で普通に見たら別に変ったところはないように見える。けれどもよく見ると、見る場所が移動すると壁面が曲面になっているから、高さは変わらないが巾が変わるという建物で、大ききの見当が付け難いが、思っているよりは大きいらしく、中へ入るとどの室も天井が高く、壁面は天井まで作ると大変だから、3、4メートルの仕切壁になったところが多く、中二階になったところもあり、上は吹抜けて大天井が共通の割には展示通路が複雑である。

21. 人類博物館 (Musée de l'Homme)

この博物館は、展示品の範囲から見ると人類学博物館と称すべきではないかと思った。ところが段々奥へ進んで行くと、最初のうちはフランス本土の出土人骨

や出土遺品を中心に展示、解説されていたのが、旧フランス植民地であったアフリカ、インドシナ、太平洋諸島の各地の民族的遺品、民俗的諸資料が出て来るので、少くとも人類学博物館ではないことはわかって来た。しかし民族学、民俗学と人類学との相違、区分といったものは明確にしないまま見て廻ることになった。そこで始めに見て廻ったままを概略述べてから、その後で私が帰ってから参考書を見て上記3領域の学問分野について分別した点を述べてご批判を仰ぎたいと思う。

さて、最初の方の出土人骨については相当詳しくパネルを使って説明してあるが、フランス語が読めないから内容はわからない。中には出土現場の状況をシリコン・ラバーを使って現寸模型にとつてあるものもある。この人骨も大部分はシリコン・ラバーによる模型だろうが、日本でも戦後は旧石器時代の遺跡が相当発掘されているのだから、模型でそれらの遺品を集大成して、日本の古代人に対する人類学的、民族学的博物館を作ってもいいと思うが如何であろうか。大阪の万博跡に国立民族学博物館ができたが、同館の取扱いは文化人類学に限られており、形質人類学の方は扱わないようである。このシャイヨー宮の人類博物館は対象地域をフランス本土および旧フランス植民地に限り、学問的領域では形質学的、文化学的に限らず、すべての領域を扱うという方針をとっている。各館それぞれに個性的に扱って結構であるが、日本には形質人類学専門のところはなく、僅かに科学博物館でほんの一部扱っているだけである。そんなことを考えながら見終ってしまった。

そこで、先にちょっと書いた、人類学の学問的分科の問題であるが、日本へ帰ってからいろいろ調べた結果、私が到達した分類は次のとおりである。



人類学は人間を対象としてあらゆる角度から研究する学問と考えてよく、広義に解釈すれば医学、心理学等もこの中に入れるべきであるが、医学は伝統的にはっきりした対象領域を確定して、種々の派生分野を従えて一大王国を築いているから、これは一応別個にして扱う方がいいと思われる。そうすると残った分野で方法論的に分類すると、研究方法として自然科学的＝法則定立的方法論をとるのが形質人類学、文化科学的＝個性記述的方法論をとるのが文化人類学であって、民族学、民俗学はどちらも文化人類学の一分子と考えていいと思う。

そして民族学と民俗学との違いは、前者は人類を伝承・習俗・体質等を基準として民族単位に分類し、民族毎にその特質を研究するのに対し、民俗学は地域に密着した特質を研究することに専念し、方法として文献による研究を峻拒するという特殊の方法論に基いているというような点が異っている。文化人類学としては、その分科はこの2つに限らず、これから種々の分科ができて来ると思われる。それらは将来の問題として現在のところは人類に関することは引くくめて Musee de l'Homme (人間博物館) としたのであろう。とにかくフランスにおける文化省の動きは注目に値する。さて評点であるが、星4つの中というところであらうか。

ここを出て次は海洋博物館であるが、これは同じ建物の中に引続いて並んでいて、人類博物館の出口に海洋博物館のチケット売場があって、そこでチケットを買って入ったように思うが、不思議とそここのところの記憶がない。

22. 海洋博物館 (Musée de la Marine)

海洋学と日本語でいえば、海洋に関する事象・諸現象を研究する学問ということになり、海洋物理学・海洋化学・海洋生物学・海洋地質学・海洋気象学等の諸分科科学を従える自然科学の一部門となるが、フランス語で Marine という場合は船団・海軍という意味と航海術という意味とがあって、この場合は航海術という意味に使われているらしく、日本の海洋学のようなものを想像して入った私はちょっと期待外れの観があったが、それでも船舶や軍艦などに興味を持っていたので、船の大小各種の模型が100以上もあって、実物の部分を切りとって展示したものなど、結構楽しく過ごさせてもらった。評価は星3つというところであらう。

ここを出て、もう一つある映画博物館を探したがその付近ではどうしても見付からない。建物の外側を一周す

るつもりで探せば間違いなく探し当てられるだろうが、建物の大きさに度胆を抜かれた位だからその勇氣はなくそれには是非見たいというほどの興味もなかったから、ここは諦めて左の曲玉に移ることにした。こちらの方には史跡博物館があるが、あいにく休館であった。入口附近のポスターや雰囲気から想像して、ナポレオン戦争が中心ではないかと思う。外に国立民族劇場と水族館があるがどちらも大した興味がなくて午前中はこれで終ることにして、シャイヨー宮を引きあげてオペラ座界隈へ戻った。つい「戻った」という言葉が自然に口から飛び出すほどこの辺りはなじみになっているのである。昼食も自然と「さくら」へ足が向いてしまう。食後案内図で見ていたオペラ座の裏にあるギャラリー・ラファイエットというデパートへ入って見た。日本のホテルのアーケードのような光景を想像していた私は、一步店内へ足を踏み入れてこれはと驚いてしまった。スーパーの食料品売場のような雑然、騒然たる有様である。それが少し落付いてから何を売っているのかを見定めて二度びっくり、1階の入口に近いその附近はシャネルとかコティなど一流のブランド物の売場なのである。日本の感覚でいったらつんと取り澄ましたおしゃれの気分がすると思っていたのに、まるで青物市場へ入ったような気がして、早々に退散してしまった。今から考えたらその隣にもう一軒プランタンというデパートがあったのだから、そこを覗いて見たらあるいは綺麗だったのかも知れない。下司の智恵は後から出るとはうまく言ったもので、そのときは何だこんなところかとデパートを見る気がなくなってしまった。

さて、ブリュッセルへの往復の列車の中で考え付いたのであるが、ループルでミロのヴィーナスを見落していたのである。パリへ帰ったら見に行かなければならないと思っていたので、今日のパリ最後の午後をループルで過ごすことにした。前に通った路、パレ・ロワイアルの横を抜けてループルまで歩いて中央入口から入る。最初に入館したときは無我夢中で歩き廻ったが、今度は一つ一つ室を確かめながら行くことにする。入口を入ったところがホールになっていて、そこから左へ行ったら一連の室がギリシャ、ローマの彫刻室になっているのだが、今日はそちらへ行く前に入口ホールを正面に突切った室にスライドやコピーを売っているのだから、そこを覗いて見た。相当大きい室で300㎡位はあると思われるところに品物も沢山あるが、人が雑閑しているのには驚いた。スライドは勿論沢山あるが、絵画の種々のサイズのコピー、彫刻の相当大きなコピーもある。日本でも大きい博物館には、

この種のもの売店があるが、品物の豊富なことと買う人の多いことはここは格段の相違がある。日本でももっと売れていると思うのだが、日本では実物指向が極端なのだろうか、日本の売店で売れているのは見たことがない。さて、そこを出て、サモトラケのニケの左側へ入ると、そのギャラリーの正面奥にミロのヴィーナスが鎮座している。今から考えると入口近くからすぐ右の室へ入って、そこをグルッと廻ってミロの背後の室へ入り、それから階段を上ってエジプト室へ入って、彫刻室は半分見落した形になつたらしい。30年ほど前に朝日新聞がミロのヴィーナスを一点だけ借りて、西洋美術館で展示したときは大評判で、入口から数百メートルに亘って行列が出来、中へ入っても6列位のすし詰のまま、グルッと一廻りして出て来るだけだと聞いて馬鹿らしくなって、とうとう見ないで終ったが、ここで30数年後にこうして自由に旁へ寄って観ることになろうとは思わなかった。ゆっくり観ることはいいもので、この2回目のときに、パリの始めでも書いたようにハムブラビ法典も妙な因縁で特別に観ることができた。

さて、10回に亘って述べて来た博物館行脚もいよいよ最後に近付いた。今晚一夜でパリとも別れを告げ、明日は北極廻りで帰国の途につくことになる。

北極とアラスカ

8月24日、ここ一週間の間見慣れたモンマルトルの丘とも別れを告げて、11時オテル・コンコルド・ラファイエットを出発、ド・ゴール空港に着く。ド・ゴール空港は外のどの空港とも違って、意図的に近代感を強調した設計である。ポンピドー文化会館がこれとちょっと似ていて、何となしに石油化学工場を思わせるような、機能優先的なメカニズムに支配された建物という感じである。例えばこのド・ゴール空港の建物であるが、塔乗設備のある主建築は円筒型で中心の方は空洞で中庭になっているから、ちょうど竹筒を立ててあるようである。その中庭の空間のところを1階から3階の反対の部屋に直行できるように、エスカレーターならぬ「動く歩道」が丸い筒の中を運行していて、つまり中庭の空間を1階の部屋から3階の部屋まで斜にパイプが通っているのである。それが一本ではなく縦横に何本も通っているから、まさに石油化学工場のパイプのジャングルを想わせる景観である。従来の美的観念で考えたら、全く機能を優先させるために美観を犠牲にしたということになるのだが、何しろデカルトを生み出したフランスのことだから、美的観念にも合理性が取入れられているのであろう。そのうちに世界の空港がだんだんとこのように機能主義になら

ないとはいえない。ルーブル美術館のピラミッドも出来上ったら、このド・ゴール空港のパイプ・ジャングルのようなのが出現するのかもしれない。

さて、いよいよ午後2時、ド・ゴール空港を飛び立った。アンカレッジまで約7,500キロを、ロンドン近い上空を通過して、アイスランドの300キロほど東北をかすめ、グリーンランドの中央稍々北寄りを横断して、カナダ最北端の多島海を北極圏をかすめるように西行し、アラスカ半島を東北から西南に横切る太圏コースを通るわけである。このパリーアンカレッジ間7,500キロはちょうど往路の成田—モスクワ間と同じ位の距離である。違うところは、前者すなわちモスクワ経由がモスクワからフランクフルトまで2時間半乃至3時間で着くのに対して、後者の方はアンカレッジから成田まで4時間半ほどかかることである。私自身の経験からいうと、往路の13時間は殆んど睡らなかったのに大して疲れたとは思わなかったが、帰路の16時間は後で相当な疲労感を覚えた。これは時間が長くかかったこともあるが、最大の原因はやはりほっとして気がゆるんだことであろう。それはさておき、この帰路のフライトで私の興味の対象は、北極海の様子とアンカレッジ付近、殊にマッキンリーの違容、アリューシャン列島の有様の3つであった。いま最後の「博物館的観察」としてこの3つを述べて、この長かった報告を終ることにする。

北極海附近

私はこのコースはてっきり北極海を通るものと思っていたが、帰ってから地図を案じて見ると北極海そのものよりはちょっと離れたところを通ったようである。というのは北極海は北極点を中心にして円形に拡がっているのではなく、グリーンランドが最も北極点に迫っていて、最も遠い点はベーリング海峡に近い東シベリア附近で、グリーンランドが北極点に700キロ位であるのに対して東シベリアは2200キロほど離れた偏心円をなしている。従ってグリーンランド上空を通るパリーアンカレッジの太圏コースは、グリーンランドの北端から800キロほど離れた辺りを東から西に横切ることになる。これから考えると私が見た海は北極海ではなく、グリーンランドとカナダの最北端・クイン・エリザベス諸島とに挟まれたバフィン湾であったものと思われる。その時に見た時計がパリ時間で午後7時15分であったこともそれを証明するようである。というのは、パリを出たのが午後2時であったから、ここまで5時15分経っているわけで、ちょうど航程の六分ほどにあたる。地図ではわからないが、地球儀で見るとその関係がよくわかる。ところでそのパフ

イン湾の様子であるが、大陸とは違って上昇気流がないから雲霧は全然かからない、その上夏は一日中日が沈まないから何時通っても大体同じ筈である。場所そのものが人煙稀なところであるから人工的な塵煙が全くない。空から見ると空気が清澄で、風もないから氷片が真っ青な海に点々と浮かんでキラキラと輝いているのが手に把握するように見える。これが北極海の夏の姿と思って間違いないと思われる。北極は南極と違って大陸がないから、変化は殆んどなく、観光の対象になるところもない。こうして一度見て置けばどんな若い人でも、その人の一生で変るところは先ずないであろう。そんなことを考えながら北極圏を通り抜けていった。

アンカレッジ — マッキンリー

アンカレッジも見るところとっては、取り立てているところはない。ただ、戦前にゴールドラッシュで一時期賑わったのと、戦後石油坑の発見で、その橋頭堡として利用されている位で、後は極東とヨーロッパとの航空路の中継基地として重要な役目を果しているだけである。ヨーロッパから日本へ、日本からヨーロッパへ渡航する空路は、モスクワ経由が一番近いのであるが、今後は変って来るとしても従来はシベリア上空通過は週何回と制限されていたばかりでなく、通過だけでも種々の制約があった。始めにもちょっと書いたとおり、私が乗った機種がDC8で中型機であったので、こんな小型機で大丈夫なのかなあと心配していると、連れの自称航空通が、モスクワ空港は滑走路が不完全で、ジャンボ機は降りられないのだということであった。これなんかは例のソ連に関する小話の一つに過ぎないとしても、現に私が体験したことだけでも次のような異常なことがあった。第1は旅客が出入したり、通過する要所に着剣した歩哨が立っていることである。これはソ連以外では私の見た限りどこの空港でも見たことのない情景である。第2に、モスクワ空港では給油と乗員交代のため着陸するのであるが、その際機内清掃のため全員一時機外に出て休憩室に入ることになっている。その降りる際に機内アナウンスがあって、手廻り品は全部持って出て機内には一物も残さないようにとのことであった。アナウンスではそこまでいわなかったが、聞くところによると、機内にカメラや時計を置いたら勿論であるが、眼鏡やスリッパに至るまで、どんな小さな物でもすべてなくなるのである。第3に、機から降りて休憩所や売店へ行く出口には手荷物検査所があって往復ともチェックを受けなければならない。このように不愉快なことがあっても、先方の許す限りは使いたいのであるから、ペレストロイカ

でもっとスムーズに通過できるようになれば、更に中国領空も通過できるようになるとしたら、アンカレッジは将来さびれるのではないかと思う。とにかく現在でもあまり人の気配のしないところである。空港に着いて周囲を見廻わしても人家は一軒もなく、空港の境界に生垣として落葉松^{かから}が一行に植わっていることが、空港建物と設備以外の唯一の人工物である。土産品を売る売店は相当大規模なのがあるが、エスキモーの民芸品のようなのが主で、全体として殺風景という印象は拭い切れない。不思議なことにこの辺境の一空港と、超大国の首都モスクワの空港とが非常によく似ていたという印象が残っている。さて、給油も終わって最後のフライトに飛び立った機の窓前に展開された一大スペクタクルを私は今も忘れることはできない。高緯度とはいえ盛夏の日が赫々と照っている季節である。北極海の氷さえ半分融けているという不沈の太陽が照らし続けている中を、このマッキンリーという北米最高の高山は、純白の氷雪に覆われて巍然^{まげん}としてそびえている。アルプスでさえ一籌^{ちゆう}を輸する程の壮観であった。それに驚いたのは、その左斜面を左から右に一文字に切り開いたように流れている大氷河である。こんな破天荒な大氷河は他では見られないのではなからうか。これこそ6194メートルの高度と北緯64度という高緯度が造り出した氷雪の芸術という外はなからう。一ヶ月に亘る長い旅も、この恵まれた贈物を最後として終ろうとしている。長い間お読み下さったことを感謝して筆を擱くことにします。

1989年元旦